

今年は春以来、会堂の礼拝の中止、再開、表面的な行事はどても限られています。当面の行事などについて、ひとつひとつについて深く考えなければ対応できないことがこんなにもあるのかと驚きの連続です。言い方を変えれば、これまで、こんなにも漫然と過ごしてきたのか、チコちゃんに「ぼーっと生きてんじゃねえよ」と言われそうです。当面は永眠者記念礼拝、そしてクリスマスをどういう風に迎えるか頭を悩ましています。それは二グループに分かれて交互に会堂の礼拝に集っていますが、悩ましいのはアドヴェントのロウソクのことです。11/28が第一週で、Bグループですが、次の礼拝、12/12の際には3本になっているということ。Aグループは12/5ですがその次の19日はクリスマス礼拝で4本になるのです。そしてふたつのグループがどうやってクリスマスを迎えるのか、とても悩ましいです。

クリスマスの話はまだ早いと思われるかもしれませんが、クリスマスとほぼ同じ時期に神殿奉獻記念祭、ハヌカの祭をユダヤ教では祝います。奉獻祭は、または光の祭ともいましてユダヤ暦キスレフ月の25日、—— 例年12月ごろですが、今年12月10日——から8日の間、燭台（しょくたい）に1灯ずつ明かりを灯します。（マカバイ記14・36以下に由来する）このようにして「紀元前2世紀に、シリア王国から奪回したエルサレム神殿を清めて神に奉納したことを記念する」祭を毎年行うのです。

この祭はいわば支配国からの独立記念の祭ですが、ユダ

ヤの独立は紀元前165年からおよそ100年くらいしか続きませんでした。その後ローマ帝国がユダヤを支配するようになり、だから再び独立のためにマカベアのような救い主（ヘブライ語でメシア、ギリシア語でキリスト）が現れないかな、と、だれもが期待していたのです。奉獻祭はそういう独立記念の祭ですから、メシアの到来を待ち望む機運が高まるの時であるといえます。

22 そのころ、エルサレムで神殿奉獻記念祭（宮淨めの祭）が行われた。冬であった。23 イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。24 すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。「いつまで、わたしたちに気をもませるのか（いつまでわたしたちの精神をもてあそぶのだ）。もしメシアなら（おまえがキリストなのかどうか）、はっきり（わたしたちに）そう言いなさい。」

そういう祭のさなかですから、ユダヤ教（ファリサイ派）は普段以上に、メシアであるとか、ないとか、社会の耳目を集めるイエスに対していらだちを隠せないのです。24「いつまでわたしたちの精神、メシアを待ち望む精神をもてあそぶのだ」と話めするわけです。もちろんメシアだと自称すれば、冒涇の罪で告発するつもりです。

25 イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。26 しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。27 わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従

う。28 わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪つことはできない。」

ここに二つの羊たちのグループがあります。ひとつはイエスの羊たちです。もう一つのイエスの羊ではないところの羊たちは、イエスに信頼しないので、それ以上の関わりはありません。

イエスの羊たちとは、イエスを救い主として信頼するひとたちであり、そうではない羊たちとは、イエスを信じないひとたちだといえます。イエスを救い主として信頼するひとたちには、無前提、無条件の信仰という拠り所がありますが、そうではない人々には、その拠り所がありません。

そしてイエスは羊たちに与えたものが五つあります；（一）イエスの声を聞き分ける（27）。（二）そしてイエスに従います。（三）イエスは彼らに永遠の命を与えます。（四）彼らは亡びることがなく、（五）イエスの手から奪われることもありません。

これを言い換えて自らの問いかけにするならば、わたしは、イエスの声を聞いているか？ イエスに従っているか？ 永遠の命を得ているか？ 滅びないか？ イエスから離れることがないのか？。

それをわたしたちの生活レベルに落とし込めば、聖書読み、祈り、それを生活の拠り所とする、そのような心と命をおして「神が共におられる」という、新たな命を生

きる、そうする限り、わたしたちは絶望しない、またイエスから離れることはないだろう。そういう営みの根幹にやるべきない信仰があるのです。

ただしここで肝要なことは、「わたしはすでにイエスをキリスト、救い主であるという揺るぎない確信がある」というようなことではないでしょう。むしろ混乱する今の時代、社会は、敗戦後の状況よりも、キリスト教界、宗教界のみならず、あらゆる組織やひとびとが確信を堅く保って生きることが難しい社会だと思えます。…かつては教会でも、10年先を見通して目標を立てていました。今やせいぜい5年先？、いやもっと短期で、かろうじて具体策を立てるような時代です。

だからむしろ、確信以前の根源、イエスをキリストであると確信と非信仰の間にある隙、信仰と非信仰の間にある何かについてなのではないでしょうか？

これを言葉を変えていうなら、「わたしはいかにしてキリスト者となったのか」「あるいは「なぜ、わたしはキリスト者ではないのか」といつとどこにあるのだといえます。

「余はいかにして基督者となりしや」という内村鑑三の著書があります。題名自体が魅力的ですが、おそらく多くの方が、おなじように自分自身の回心の出来事を克明に詳細に言葉にできたらと願っているのではないかと思います。わたしも過去にそれを試みようとすることは何度かありました。しかし結局回心の中心に何が起こったのかを言葉にすることはできないと思われています。その回心が、後にわ

たしの人生にもたらした恵みを知れば知るほど、前後をあつさりと言ったことしかできなくなるのです。今、文章にできるとすれば、「20歳後半の数年間にわたり、その後の人生を大きく変える出来事が起こった、…」。

ちなみにC・S・ルイスというひとは自分の回心の出来事をこのように書き綴っています。

明るく日が照っていたある朝、わたしは兄のオートバイのサイドカーに乗せてもらって自然動物園のウイップスネイドに向かっていた。乗る前は、イエス・キリストが神であるということを感じてはいなかった。ところが動物園に着いた時には、そのことを信ずるようになっていた。

そしてなお、だれもみな、その中心にある信仰と非信仰の間にある出来事をただしく言葉にすることはできないのです。

過去にユタヤの民の間で起こった信仰者たちの身に起こった出来事、そこに連なるわたしたちの身に起こった出来事を、イエスは、このようにおっしゃるのです

29 わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。30 わたしと父とは一つである。「。

29 わたしに彼らを与えて下さった父は、すべてにまさって偉大である。(塚本、田川、聖書協会共同訳)

イエスにわたしたちを与えた神は、すべてにまさって偉大である。だれもわたしたちを神の手から引き離すことはできない。そして神とイエスはひとりの存在である。

だからわたしたちが、時代の波に翻弄され、いかに不確かであっても、揺るぐ存在であっても、そのわたしたちを神は選び、イエスに与え、つないでくださった、それほど価値ある存在なのです。